



絵・堀内誠一

**2019年10月1日
発売予定**

定価 本体3,400円(税別)
20場面/26.5×38.2cm
ISBN978-4-494-08092-2

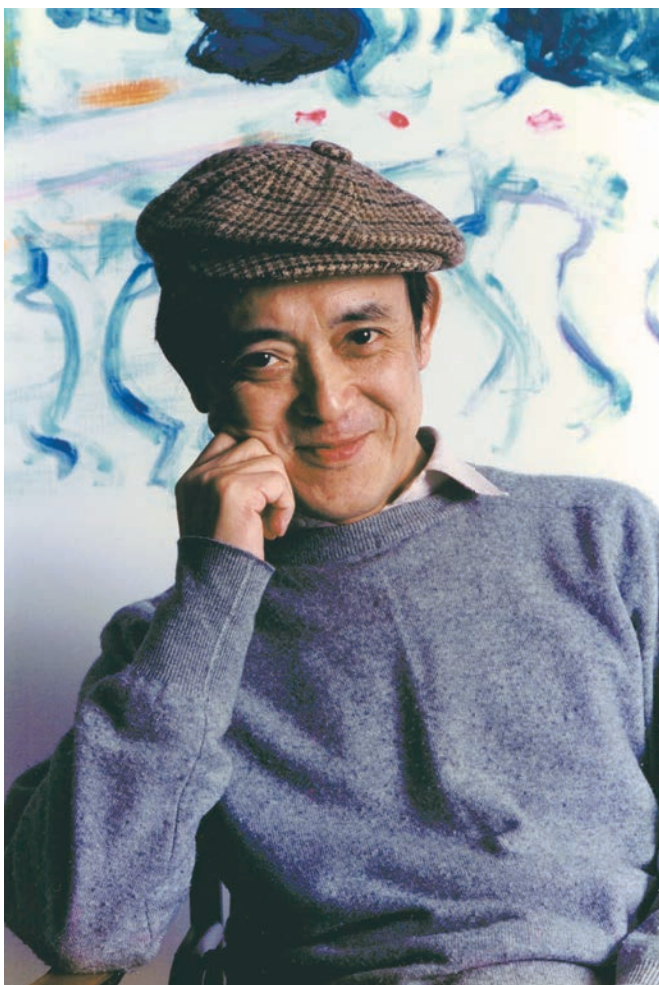


～堀内誠一の未発表の傑作紙芝居!～
うみからきた おとこのこ

堀内誠一 ● 再話・絵 堀内紅子 ● 脚本

童心社 お問い合わせはホームページ <https://www.doshinsha.co.jp/> または TEL.03-5976-4187 (広告宣伝グループまで)

堀内誠一さんと紙芝居



アートディレクター、 絵本作家・堀内誠一

1970～80年代の雑誌の黄金時代に、『an・an』『ポパイ』『ブルータス』など、誰もが知る雑誌のロゴデザイン、レイアウトデザインを作り上げた、アートディレクター堀内誠一さん。子ども向けの作品としては、1958年、絵本『くろうまブランキー』で絵本作家としてデビューし、『ぐるんぱのようちえん』『たろうのおでかけ』『ちのはなし』（いずれも福音館書店）、『マザー・グースのうた』（草思社）など、数多くのロングセラー絵本を世に送り出し、54歳の若さで急逝するまで、広告、雑誌、絵本などさまざまな分野で活躍し多彩な仕事を残しました。（1932-1987）。



堀内さんが手がけた雑誌のロゴ

子どもの頃に見た紙芝居の感動を

東京墨田区向島で生まれ育ち、子どもの頃に街頭紙芝居を見て育ったという堀内誠一さん。

紙芝居『したきりすずめ』の絵を引き受けた際「自分が子どもの頃、コワーい紙芝居をゾクゾクして見た感動を外国の子どもにも伝えられると思ったから」と語っています。その後パリへ渡り、翻訳家の山口智子さんとともに、自身が絵を手がけた紙芝居『したきりすずめ』をフランスの図書館で演じた時のことについて以下のように記しています。

「紙芝居の持っていた魔力は絶大なもので、子どもたちは、この服装も習慣も民族的気質もたいへん日本的な紙芝居に全身うつつをぬかしていた。熱中のあまり椅子からころげ落ちた子も落ちたまんまのかっこうでラストまで目を離さなかった。」*1

*1 「母のひろば」1973年5月号「紙芝居パリに行く その1」堀内誠一



『したきりすずめ』松谷みよ子 脚本／堀内誠一 絵（1973年）



『こぶたのまーち』
村山桂子 脚本／堀内誠一 画（1977年）

『堀内誠一の ながぐつをはいたねこ』
ペロー 原作／堀内誠一 脚本・画（2011年）

フランスの子どもたちへ紙芝居のよろこびを

フランスのパリ郊外クラマールの「小さな丸い図書館」

1973年にフランス・パリで単身で暮らしはじめた堀内さんは、翻訳家の山口智子さんの紹介で、パリ郊外クラマールの「小さな丸い図書館」に通うようになります。移民が多く、当時絵本が家にない家庭も多かった同地区で、同館は館外での読み語りや図書館に子ども達を招くといった活動を始めた先駆的な図書館でした。この『うみからきた おとこのこ』の原画は、子ども達に楽しんでもらおうと、堀内さんが1973年に製作し同館に寄付していたもの。同館の2018年日仏友好160周年の企画で、原画の存在が明らかになりました。



「小さな丸い図書館」(La Petite Bibliothèque Ronde)

46年前の、父の思いを継いで

デンマークの民話を元にした物語

原作は「人魚ひめ」を書いたアンデルセンの母国でもあるデンマークの民話です。主人公は、人間と人魚の子オラフ。人魚伝説を下地に、不思議さと神秘性、そしてゾクゾクするような怖さもあわせもった、観る者を夢中にさせるストーリーです。

堀内さんは、かつて挿絵を手がけた絵本(※2)をもとに自分なりの解釈を加えて紙芝居として製作しました。本作の脚本は、堀内さんの次女で翻訳家の堀内紅子さん。長女・堀内花子さんとも協力して、原画とともに残されていたあらすじを元に、構成も見直しながら、今の日本の子どもたちに向けてわかりやすく、紙芝居らしい特徴をつかんだ、いきいきとした脚本になりました。



見上げるような大きな若者に成長したオラフ。地主の手伝いで、半日がかりの穀物の実を分ける仕事を、息のひとふきで片付けます。



右から堀内紅子さん、堀内花子さん。本作についてのお二人のインタビューを童心社ホームページに掲載予定です。
※2…『海からきた力もち』(神宮輝夫・文、ポプラ社、1969年 現在絶版)

あらすじと魅力・・・・・・・・・・・・・・・・

海で大嵐に会い、行方知れずとなっていた、ひとりぼっちの貧乏な鍛冶屋。しばらくして無事戻ってきた鍛冶屋を村の人々は不思議に思っていました。ある日、鍛冶屋の所に、嵐の時に鍛冶屋を助けた人魚と鍛冶屋の子だという、男の子・オラフが訪ねてきます。ほんの几日かで見上げる程大きく立派な若者になったオラフは、人の役に立とうと父の元から旅立ちます。オラフは地主の元で働くようになり、大変な仕事をかるがるとこなしていきます。そこで地主は、オラフに悪魔に貸した金を返してもらってくるよう頼みますが……。



勢いのある絵と ドラマチックな展開

いきいきとしたタッチで勢いよく描かれた本作の絵は、元々印刷・出版を前提とせず、純粹に目の前の子どもたちを驚かせよう、喜ばせようという思いで堀内さん自身が楽しんで描いたもの。人魚の子オラフが、人の役に立とうと世に出て成長していく物語でもあり、また悪魔と対決する冒険物語でもあります。



城へ案内するふりをして、オラフを水中にひきこもうとする悪魔 (17場面)



自分が人魚の息子であることと、その力に目覚めるオラフ (18場面)

主人公オラフの魅力

子どもたちが共感する、かわいい男の子の姿で登場する人魚の子・オラフ。立派な若者に成長し、悪魔との戦いでは、半魚人の姿にもなります。

まっすぐな気性と力強さ、そしてどこかに怖さもあわせもった魅力的な主人公です。

